

山と博物館

第22巻 第3号

1977年 3月25日

大町山岳博物館



春雪の若一王子神社 三重の塔

撮影 寺沢 章夫

淡雪雑感

今年に異状な寒波が長く続いたためか、雪国の生活に馴れているはずなのに、春の気配の訪れるのを待ち遠しく思った。

ことに雪の深い地方の人達にはなおさらであつたに違いないだろう。

真冬日が何日も続くと、深い雪の中で人はちぢまって動き、行動範囲もちぢめ、気持さえもちぢまってしまったような感じをもつ。

暑さ寒さも彼岸まで」とはいうものの、北アの麓では4月に入つても雪の舞うこともある。

しかし、3月の中旬ともなれば、陽ざしの暖かさが違い、田の畦にはオオイヌノフグリやナズナが可憐な花をつけ、小さな春の訪れを知らせてくれる。

何かほつとした、ゆとりのようなものがうまれ、気持がなごやいでくるのも、長い雪の中の生活から解放された喜びのあらわれであろう。

彼岸の中日のすぎた夜、雨はシトシトと地をうちなつかしい音を聞く心もちであつた。

雨音のしなくなつた翌朝、地面は白く覆われ、見上げる空からはボタ雪がとめどなく降りしきつていた。

しかし、その雪をみる気持は、違う。

このボタ雪はもうたくさん積ることはないだろうし、積つた雪も、それこそはかない命であることがわかっているからである。

きくところでは、南の方ではサクラは満開という。

爺ガ岳の種まき爺さんも姿をみせ、農作物の種つけの時期でもある。

去年の冷害といい、今年の二百カイリ問題といい生活はいよ／＼厳しくなるだろうなど

…と思いつつ、春の幸であるフキノトウ、アサツキ、セリ、ナズナなど自然の恵みを骨に地酒を傾け、消えゆく淡雪をながめながら、

一時現実を忘れるのは、我ら庶民に残されたささやかな楽しみである。(グチ猿)

飼育下のライチヨウ(51年度)

荒井今朝一
宮野典夫

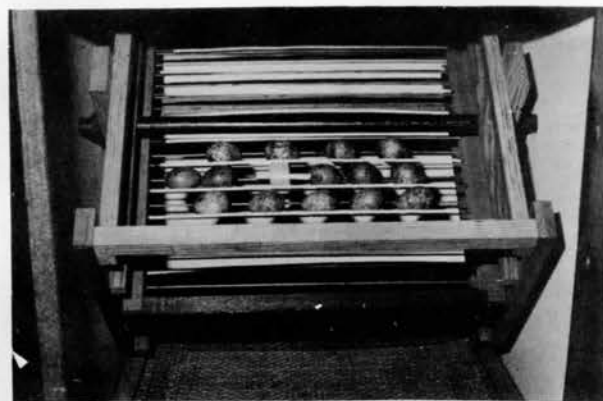
昨年度より再開しましたライチヨウの低地人工増殖は、本年はついに、低地人工・自然繁殖の成功まで導くことができました。これも大町市民のみなさんをはじめ、関係各位のご協力のたまものと感謝申しあげる次第です。ここでは、その経過と概要を昨年にひき続いてご報告しあげ、一層のご指導とご支援をお願いするものです。

1、繁殖の準備

昭和五十年の七月、爺ヶ岳で採卵した六卵からフ化したヒナは、四羽が順調に成長しました。これは、雌雄ちようど二羽ずつという



抱卵中のメス



フ卵器中の卵

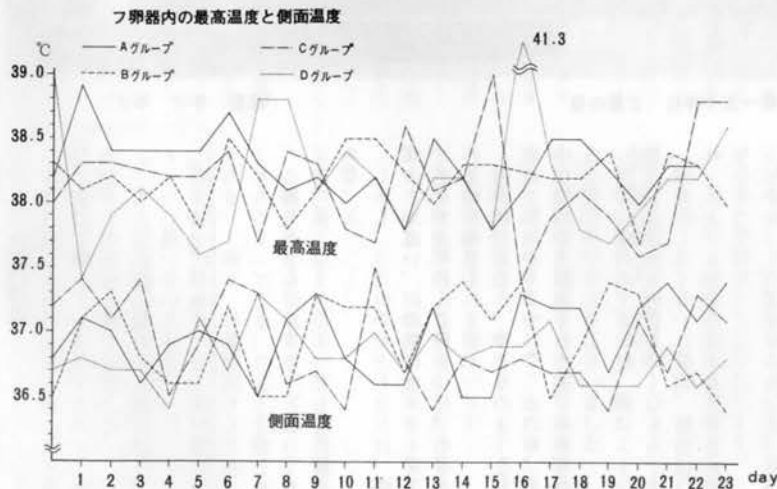
こともあって、五十年の十一月には、二ツガイに分けて、繁殖の準備に入りました。一ツガイは別系統(第二飼育舎)、一ツガイは同系統(第一飼育舎)ということでした。五十一年に入りますと、まず第二飼育舎の雄が一月頃から発情してきました。三月に入ると両飼育舎の雄とも、真赤な肉冠を開いて盛んに、鳴きたてます。野外的ものよりいくぶん進んでいるというのが、私達の判断でした。この頃の雌は、まだ、雄ほどには換羽も進んではいけません。ライチヨウの発情とともに、私達もそれに

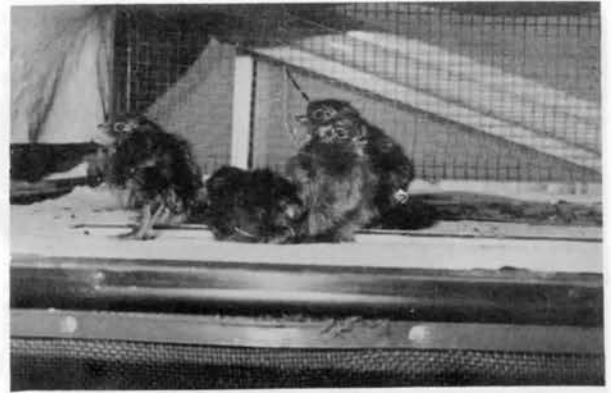
2、自然繁殖

対応した対策が必要となります。まず自然抱卵、育雛を目ざすことなので、飼育舎内の砂の入れ替、薬品及びスチームクリーナーによる消毒、周辺地へのサラシコの散布などが行なわれました。続いて五月には、営巣地をコントロールするために、営巣環境の整備、巣材の確保(主として赤松の枯葉を消毒したもの)を行ないました。

食のために朝夕二度ほど巣を離れる以外はほとんど動かずにじっとしています。こうして七月二十八日、抱卵した七卵から四羽のヒナがフ化しました。残り三卵のうち一卵は無精卵で、二卵は発生中止でした。フ化したヒナは、後でわかったのですが、雄一、雌三でした。その日のうちはかなりの時間が抱雛で占められていました。私達は、雛親が抱雛するので安心していただけのですが、夜になると急に抱雛をやめて自分の寝ぐらさかしまわるためにうろろうしはじめました。そのため、フ化したばかりの雛は、ピーピー鳴いてばかりいます。私達は、どうするかま

今年度の最大の成果は、第一飼育舎の一ツガイがこの自然繁殖に成功したことでした。第一飼育舎の産卵開始は六月七日で、六月十六日までに五卵を産卵し、更に産卵が続いたので、六月二十三日このうちの五卵をとりあげ、人工フ化を開始しました。この後も産卵し、計十二卵を産卵し、七月五日より抱卵に入りました。営巣場所は、冷房舎内の砂場の一角で、ほぼ私達の予定した場所でした。巣の大きさは、直径三十五センチぐらいで、形は地面に穴を掘り、あらかじめ用意してあった巣材を自分で口にくわえてはこび入れたすりはち状です。抱卵中は採





人工育雛中のヒナ

よいましたが、結局、雌親が寝ぐらについてから、雛を親の腹下に入れてやるを試みましたが、驚いたことに、その雛を雌親は、再び抱きはじめました。以後は、夜になってもそうしたことはなくなりました。雌親のこうした行動の原因は、飼育舎の構造上の欠点、寝ぐらと人の出入口が近すぎるにあるように思われました。

次に問題となったのは、親と雛の飼料の違いです。この問題は、私達は、親にも雛にも食べられる飼料を大きな平らな「お盆」に入れて与えることで解決しました。親が食べるので、雛もいっしょに食べるようになりました。

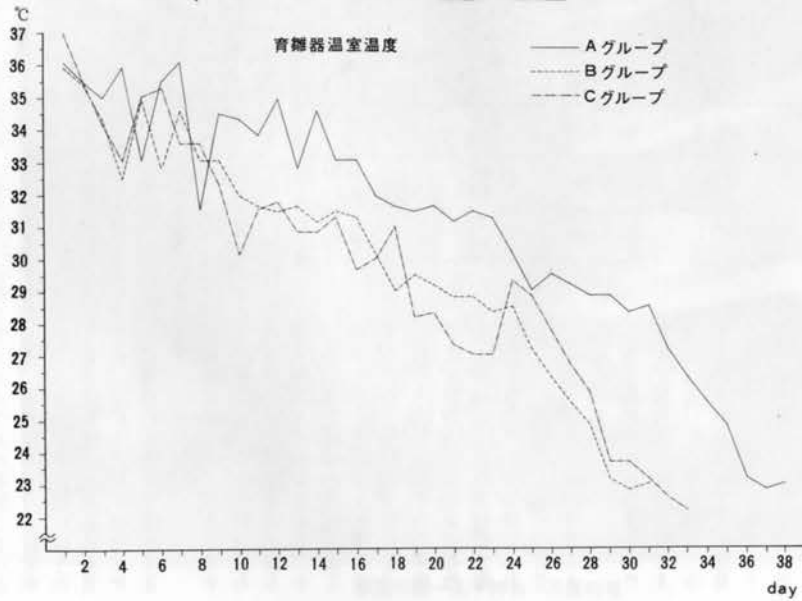
こうして、飼料にもつき順調に育つようみえたのですが、フ化後日目に突然雌雛が羽死しました。原因は雛が小さすぎて不明ですが、夜間に親の腹下から外に出たため

と推定しています。残り三羽の雛はその後も順調に育ち、現在も無事生存しています。

3. 人工フ化

一方、第二飼育舎のツガイは、第一飼育舎よりも早く産卵を開始しました。産卵の開始は五月三十日でした。その後一日おき又は三日に二卵ずつ計二十九卵を産卵しました。この数字は驚くべき数です。ちなみに野外のライチョウは平均六卵ぐらい、多くても八卵から十卵といわれています。この飼育舎の雛はついに抱卵に入らなかつたので、あらかじめ用意してあった立体フ卵器によって人工フ化を試みました。人工フ化は第一―第四グループまでに分けて、第一飼育舎のものとあわせて三十二卵試み、フ化九羽、無精卵九卵、発生中止卵十四卵という結果でした。平均フ化率三九・一％ということですが、これは、まだまだ満足の数値と云えませんが、この原因は、一つは温度コントロールのむずかしさにあつたとおもわれます。図のように、かなり温度コントロールは注意深くおこなつたのですが、フ卵器が旧型となつていることなどから、一時的な温度の上りすぎ等があつたようです。それと、フ卵開始後一週間以内に中止卵が集中していることからフ卵初期の温度がどのくらいが適当かというものが、今後の問題のように思われます。

なお以前に人工フ化を試みた時は、卵自身が野外よりも小型であつたことが原因



因としてあげられていますが、今回のものは数のわりには、卵長、卵重ともに大きく、野外的なものとはほとんど変わらなかつたことをあわせて、ご報告しておきます。

また、雛が抱卵に入らなかつた原因はまだまだ検討を要しますが、一つは第一飼育舎との大きな違いとして、自然光線の入射量の問題があると思われれます。一般に、鳥類の繁殖行動は光に対する反応からくるといわれますが、この飼育舎は、冷房効果をあげるために自然光の採光が少なく人工光線(主として日光灯と紫外線灯)に頼っていました。このこ

とは、光量の変化による換羽の問題とともに今後検討してゆくべき問題の一つでもあります。

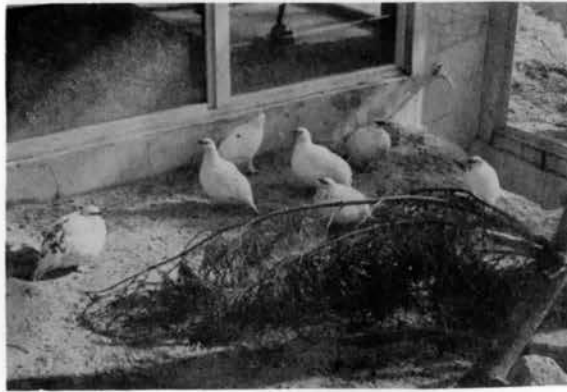
4. 人工育雛

こうして人工フ化によってかえつた雛は、やはりフ化した時期によって第一―第三のグループにわけて人工育雛を試みました。人工育雛は昨年の経験もあつたので、かなり順調にゆきましたが、それでも途中で二羽が落命しました。この原因は育雛自身よりは、フ卵中の温度コントロールに帰されるように思われます。フ卵中の温度(又は湿度)のコントロールが順調でなかつたために、雛が弱く、卵黄が未消化で体重もかなり低くなつていました。

それでも残りの六羽は、順調に成長し、いずれのグループもフ化後四週間から五週間で排温し飼育舎内に移しました。この間は、早



自然育雛中のメスとヒナ



人工育雛で育ったライチヨウ群

朝より夕方八時頃まで昨年同様給餌を試みたことは申すまでもありません。育雛率は七五%でした。

人工育雛については二年間の経過からみてほぼ満足の結果がでていますが、まだまだ問題があるように思われます。特に市販の育雛器は二ワトリ用のものであるために、行動力が強く、環境に敏感なライチヨウのためにはかなりの改良点があるようです。次の段階では、このライチヨウ用の育雛器の開発も検討してゆくべき一つの課題です。

5、成鳥の飼育

こうして人工、自然あわせて十三羽の雛がフ化し、十羽が無事排温も終えて若鳥になりました。これらは、約百日令でほぼ体重も親鳥並になりましたので、親鳥と合同して飼育しました。すでに、季節は秋です。温度に対する対策もかなり楽になっていました。しかしまたこの時期は過去のデータ等により、一番病気の発生しやすい時期でもあり

ライチヨウ用飼料の組成 (%)

飼料名称	76-A	76-B	76-C	76-D	76-E 76-F	77-A 77-B
期 間	4月1日～ 6月13日	6月14日～ 9月5日	9月6日～ 10月21日	10月22日～ 2月27日	12月28日～ 2月28日	3月1日～
粗 蛋 白	16.8	15.3	16.0	14.4	14.8 13.8	15.5 14.7
粗 脂 肪	6.8	5.7	5.7	5.0	5.7 5.5	6.1 6.3
河溶無窒素物	47.6	51.5	50.7	52.0	51.6 52.7	50.4 51.0
粗 纖 維	8.7	8.7	8.8	9.1	9.2 9.2	9.1 9.2
粗 灰 分	5.0	6.5	5.0	4.9	5.0 4.9	5.1 5.0
カルシウム	1.08	0.91	0.89	0.90	0.92 0.91	0.91 0.91
リ ン	0.69	0.69	0.71	0.68	0.70 0.69	0.70 0.70

ます。私達は、昨年の経験等からできるだけ一般管理に注意しましたが、不幸なことに十羽のうち二羽が九月と十一月に落命しました。どちらも雄です。十一月に落命したのは、デッキブラシを清掃に使用しているのですが、その針金の一本を飲み込んだためのもので、事故でした。しかし、九月に死亡した雄は、原因は不明ですが、コクシジウムが多数検出されました。その後の検査では親鳥四羽、今年の子の残り八羽合せて十二羽の現存鳥の

すべてにこのコクシジウムが寄生していることがわかりました。コクシジウムは元来寄生性(それぞれ種にはそれぞれ独特のものしか寄生しない)があると言われているのですが、急にコクシジウムが表れたことは、伝染経路も含めて検討する必要があります。

こうして十一月の末には、十二羽のライチヨウが飼育されていきました。これらのうちわけは、雄四、雌八です。この頃になると雛も親も換羽がはじまります。十二月には、ほぼ白色化しましたが、概して親よりも雛のほうが換羽が早いようでした。私達は冬期に入るための準備として飼育舎の砂の入れ替作業と水道に対する凍結防止策を施しました。特に砂の入れ替えは、半年に一回ずつ行ない消毒も併せて実施するようになっています。

十二月にはまたライチヨウの第三飼育舎の建設もはじまりました。この飼育舎は、今までのものよりもずっと簡易な構造で、冷房も家庭用クーラーを用いたものです。これは、過去の経過から検討したもので、五十二年度には、この飼育舎による繁殖を計画しています。

6、近況と五十二年度の目標

現在は雄一、雌二の組み合わせを四つに分けて飼育していますが、この鳥の習性によってすでにツガイを形成する時期にきています。雄はかなり換羽がすすみ、再び黒褐色になってきました。更にまた肉冠を開いて盛んに威嚇します。

そのため、三月に入るや五十二年度の繁殖に対する準備を開始しました。すでに周辺の整備はほぼ終了し、次はツガイの形成です。五十二年度は、四ツガイと雌のみのグループの計五つの飼育舎が必要となっていますが、現在のところ冷房のついた飼育舎は三つだけです。そこで、一つは一般の金網禽舎に小型クーラーをとり付けた飼育舎と、組み立てによる禽舎で冷房を用いないものの二つを新たに準備しました。こうしたほぼ低地気候で飼育繁殖をめざすのも新しい問題の一つだと考えています。

博物館だより

このように五十二年度は、昨年の成果をひきつぎ、更にライチヨウの保護増殖対策の確立をめざし、私達もライチヨウもがんばっていることを報告して近況とします。

(山博学芸員補・東京農業大学)

二寄付ありがとうございました

- 左記の方々からライチヨウ保護増殖事業に寄付金がよせられました。お礼申し上げます。
- 静岡県静岡市 中川まち子
- 東京都練馬区 藤田いさを
- 茨城県水戸市 三の丸小学校3年3組、高橋晴美他39名(敬称略)

訂 正

22-2、2P 瓜生卓造→瓜生卓造に
お詫びし訂正いたします。

山と博物館 第22巻 第3号
一九七七年 三月二十五日発行

発行所 長野県大町市TEL②〇二一
印刷所 大町市下町山岳博物館
大町市 大糸タイムス印刷部
定価 年額(八〇〇円)(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野)三二二九三